

子どもから何を

どのように学んだらよいか

～ 共に育つということ～

藤田 芙美子

日本保育学会は、昭和六十二年の第四十回大会から、会員が、自主的に企画、運営するシンポジウムを募集し、プログラムに加えるようになった。初めは二つのテーマで発足したこの自主シンポジウムは、最近では五つものテーマが並ぶことも多い。私はこのシンポジウムに、ある時は話題提供者の一人として（第四十二回大会・於 十文字学園女子短期大学）その他の大会では会場参加者として、毎年参加してきた。この自主シンポジウムは、企画の段階から、個々の会員の自由参加に開かれていることから、真にそのテーマについて討論し理解を深めたいと考える保育者、研究者たちが相談して討論者として集まることができる。したがって会場はいつも自由な雰囲気、フロアからの参加者を巻き込んで活気のある討論を展開する場となってきた。

昨年の秋、下山田裕彦氏（静岡大学教授）から「来年の保育学会、自主シンポジウムで、『子どもから何を、どのように学んだらよいか』というテーマで話し合いをしたいが、どう思うか」という問い合わせがあった。氏が企画されたその年の保育学会の自主シンポジウム「保育の実践と研究において、数量化は果たして有効か」

で、会場から私が発言したこと「保育者、保育研究者は、子どもに何かを指導したり、子どもの能力や行動を測定したり、数量化したりする以前に、子どもから学ぶことが沢山あるのではないか。子どもたちは大人とは違ったあり方で思考し、行動している」が心にとまり、それ以来「子どもから学ぶ」という問題を深めて考えてみたいと思っておられたということであった。この時の私の発言は、私自身が大人の価値観に基づいた音楽教育、音楽教育研究を行ってきた、そのような教育観のもとで、子どもの音楽能力や行動を測定したり、数量化してみたところで、子どもの本来の音楽行動の性質について知ることは少ないことを実感していたので、このこと

を他の保育者、研究者たちに伝えたいという強い気持ちからのものであった。したがって、「子どもに学ぶ」に關しては説明したいこと、多くの保育者、研究者たちと話し合いたいことが沢山あったので、このテーマでのシンポジウムの企画に即座に賛成した。

話題提供者のメンバーはすぐに決まった。子どもたちの心の近くにいる保育を、ご自身の四人のお子さんたちと、愛育養護学校・家庭指導グループの子どもたちを育てる中で、実践しておられる津守房江氏、静岡大学の大学院を今春終了された若い保育研究者の東義也氏、そして現在「紀の国子ども村」の建設にとりくんでおられる堀真一郎氏（大阪市立大学教授）である。お電話でシンポジウム企画の趣旨をお話しし、話題提供者になって頂きたいとお願したところ、幸い全員が趣旨に賛同して下さり、参加を承諾して下さった。指定討論者には話題を刺激的に展開して下さる方をということで、保育研究者であり教育方法の研究者でもある小川博久氏（東京学

芸大学教授)にお願ひすることになった。

メンバーが決まり、私も話題提供者と連絡係を引き受けることになってからの半年は、私にとってはシンポジウム開催当日に勝るとも劣らない程、学ぶことの多い日々となった。メンバー諸氏から寄せられたシンポジウムでの発表要旨等を読み進めるにつれて、メンバー諸氏のお考えをもっと知りたいと思うようになった。そしてあらためてメンバーの著書を読み始めた。津守氏の『育てるもの目』(婦人之友社)、堀氏が翻訳をされた英国の教育者ニイルの著作集(黎明書房)、下山田、東氏共著の論文「自分自身になることとしての遊びについての基礎研究」(静岡大学教育学部研究報告書)等などである。子どもと日常のやりとりの中で、子どもの内側にある意味を見いだし、それに共感することによって、子どもから学び、共に育つてゆく著者たちの姿は、私が狭い経験の中で「子どもから学んだこと」を、さらに深めて考えるために、大きな示唆を与えるものであった。

シンポジウム当日は、用意された教室がほぼ満席とい

う予想以上に大勢の参会者が集まった。下山田氏の暖かく、かつ問題点を追求する司会のもとに、討議は終始、討論者たちと会場参加者たちが対話する雰囲気が進められた。

津守氏は、氏の保育の場である愛育養護学校・家庭指導グループに通う、四歳の男児と心が触れ合った出来事を次のように話された。

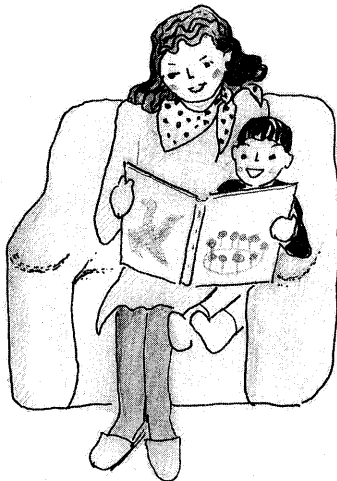
この子どもは気に入らないことが起こると他の子どもや保育者に乱暴したり、噛みついたりすることがあり、危険なことがあるので、そういう不安定な状態になったときには保育者が抱いて止めるということが保育者たちの話し合いで決められていた。ある日、子どもが大きなおもちゃのトラックを持って、滑り台を逆さ登りするのを後ろから押してほしいと要求したのに津守氏が応じて、お互いに息を切らして、危ない思いをしながら一緒に何度も滑り台を登りきるという出来事があった。このことがあった後、子どもが氏に対して心を開いた小さな出来事が幾つも起こった。この時に氏は初めて、この子

どもが本当は保育者にもっと抱き止めてほしいのだ、抱き止めてほしいから乱暴をするという構図が出来てしまっているのだということに気がついた。保育者は子どもの近くにおいて、身も立場も低くして子どもが自ら生きていく力を支えながら一緒に生きてゆくことが大切である。それによって子どもは自分が背負っている課題を投げかけてくれることがある。それをどう受け止めるかは一回一回が課題なのである。氏は「保育の中で子どもから学ぶ」ということは身体を使って受け止めることだと思ふ、と結ばれた。

東氏は、子どもが遊びの中で自らを養っていく過程を、転居してきて、幼稚園年長児クラスに新しく入ってきたH君の遊びと遊びの変化をとりあげて次のように説明された。

H君と東氏の出会いは、クラスの子どもたちが大事に飼っているザリガニをH君が水槽からいきなり掴み出して東氏の前に差しだし、氏の注目を引こうとしたことに始まる。この後も東氏はH君を含めて他の子どもたちと

園庭にて、ビーチ・ボールでのキャッチ・ボールをするが、この時、H君は東氏が他の子どもに投げるボールを全部飛びついてとってしまふ。他の子どもたちはそのようなH君を非難して袋叩きにするが、ボールをしっか



り抱えたH君は抵抗できない。やがてボールを抱えて立ち上がったH君は彼らにボールを投げつけたり、砂をかいたりする。その後もこういったことが数回にわたって起こる。東氏はこのH君の行為を本当は幼稚園の子どもたちと遊びたい、それでも今は沢山遊べないというくらいだいたい気持ちの表れだという。H君の遊びはその後次第に変化する。それは他の子どもたちの出方を一歩退いて観察して関わるものであり、自らをコントロールするものとなる。このH君の遊びの変化の中に、東氏は子どもが自らの存在の仕方を捉え直し、自分を変化させる過程を見出している。そして、このような子どもさまざまな信号、メッセージに答えるために自分がどう変わればよいのかを考えること、自分は彼のために何をすることができるかを真剣に考えることが「子どもから学ぶこと」ではないかと述べられた。

堀氏は「『子どもから学ぶ』というテーマ自体に、学んだものを使って子どもをどうかしようという大人の傲慢さを感じる」と話をはじめられた。「子どもから学

ぶ」ということを意識した時には、それを「利用しよう」とするよりも「共に在ろう」とした方が楽しいし、結果もよいはずだといわれる。氏は子どもたちとおもちゃづくりや絵本づくりをする中で、保育者としてのヒントを得たいと考え、観察を行ってこられたが、客観的な観察は子どもの内面に触れることがすくないことにつき、最近では、感動する場面を記述することが大切と考えておられるという。そして、子どもの行動に感動するということには必ずしも子どもが素晴らしいことをした時ではない。むしろ、へまをしたときである。例えば、絵の具をぬりたくって衣服まで絵の具をぬる——こういう子どもにも触れたとき、私は嬉しくなる。そういう子どもたちの行動は私たちを解放する。出来上がった枠組を壊して新しい世界を開いてくれる。このような子どもにも触れたとき、私たちは子どもから何かを与えてもらったと考える、と述べられた。

藤田は、子どもたちの音楽の学び方、あるいは作り方が、指導する大人が考えているそれと全くちがうこと、

子どもたちは日常の話し言葉で他者と真剣に対話する中で音楽的なものを学び、さらに創りあげる作業をしていることを、幼稚園での「子どもの歌」の指導場面と、藤田と子どもたちで遊んだ「飛んだ、飛んだ」のゲームの場面を例にとりあげて説明した。

「飛んだ、飛んだ」を子どもたちと歌いあったとき、私が歌の旋律に当てはめて「ごぼう^{高し音}」を「ごぼう^{高し音}」と日本語のイントネーションを無視してうたったために、子どもから意味が解らないと指摘、訂正されたことについて述べ、子どもたちにとっては対話することと歌いあうことは連続した行為であり、「歌」は大人が考えるように人工的、表面的なものではなく、もっと気持ちに直接の表現であることを知ったことについて説明した。

四人の話題提供者たちの発言に対し、指定討論者の小川博久氏からは次のような事柄を、さらに明らかにすることの必要性が提案された。

自分は基本的には自己を変革することの必要性を感じている。しかし、四人の話子どもとの関連性の中に置

いたときに、その事がどこまで自分に言いまされるのかということについて考えてゆく必要がある。幼稚園や保育園の子どもたちは、さまざまな見えない形で、大人の常識を押しつけられているのが現実である。例えば、幼稚園には囲いがある。登園時間がある。お弁当はお昼の時間に食べなければならぬ。また、保育者は三十人もの子どもたちと相對しているのが普通である。一人の子どもとじっくり関わる時間はない。「皆さんお集まり」と保育者が言うとき、一人一人の子どものことは考えていない。このような時、四人の話題提供者たちが述べたことはどういふ文脈に位置づくのか。四人が述べたことは、日常生活の中で位置づけなければならぬ。そうであれば教訓になってしまう。幼稚園で毎日同じことを繰り返すことと、自分を振り返ることをどう位置づけるのか。自分の姿が見える装置をどう作るのか、が問題になる。小川氏の質問に対しては、話題提供者各々の立場から、子どもとの対応はごく自然なものであり、生きるためのぎりぎりのところで「共に在る」といった関係な

のである。一人の子どもと対応すること、集団の子どもに対することの間にはそれほどの矛盾はないと考える、等の意見が述べられた。

次いで、会場の参加者からは、「子どもはおとなの常識に無理やりにはめられるのではなく、ついてくるところがあるのではないか」「保育者が自己を変革するのは、ハッピーな気持ちでというより、むしろ追い込まれている場合が多いのではないか」「保育者は子どもが主体的に何かをしてゆくよう用意するとき、はじめて子どもから学ぶことが可能になるのではないか」「保育者は、自己変革をする用意がある、ということがまず大切と考える」等などの意見が寄せられた。

二時間二十分にわたってのシンポジウムは、子どもたちを目の前にする保育者、保育研究者たちが知見を分かちあい、さらに考えを進めようという熱意に満ちたものであった。討論者の誰もが子どもの生きる力を信じ、子

どもにとっての意味を共感するところから保育をはじめようとしていた。「子どもから学ぼう」ということから始まったシンポジウムが、このように熱心に討議されたことは、これからの保育と保育研究が「子どもの事実」に「学ぶこと」を中心と考えて行かねばならないことの表れであろう。小川氏が問題提起された「子どもは目に見えないさまざまな形で大人の常識を押しつけられているという現実の中にいる」に対して、堀氏が答えられた「子どもに相對することは全て、どんなに頑張っても子どもに押しつけているということではか言えないか、ということについては、もっと深刻な、本質的な議論が必要である」は、今回の討議をさらに進めるための方向を示している。

「子どもから学ぶ」ということを、日本の文化、社会の脈絡の中に位置つけて考えて見る必要があるだろう。

(国立音楽大学)